

19世紀前半のロンドンにおける リージェント・ストリート建設 ——ショッピング・ストリートの誕生——

芝 奈 穂

はじめに

19世紀初頭、ジョージア朝ロンドンで行われた「都市大改造」(metropolitan improvement)は、近世ロンドンにおける最も大規模な都市計画の事例である¹。その都市改良の要となったリージェント・ストリート (Regent Street) は、リージェンツ・パーク (Regent's Park) とともに王室 (Crown) および政府主導により建設された。その設計を請け負った建築家ジョン・ナッシュ (John Nash 1752-1835) の計画概要は、ロンドン北部にあった広大な王室所有地をリージェンツ・パークに造りかえ、当該パークとセント・ジェイムズ・パーク (St James's Park) 近くにかつてあった摂政皇太子、後のジョージ4世 (the Prince Regent, later George IV) の宮殿カールトン・ハウス (Carlton House) とを結ぶ大通りを建設し、大都市ロンドンをパリに匹敵するような帝都に改造しようというものであった (図1)²。リージェンツ・パークは、拙稿「19世紀初頭における王室リージェンツ・パーク・エステート計画に関する考察」で述べたように、紆余曲折を経て、ヴィクトリア朝初期に一般公開され、現在ではロンドンを代表する公園となっている³。リージェント・ストリートは、19世紀を通して最も重要な目抜き通りであったが、現在でも、ロンドンの中心地における南北を結ぶ主要幹線道路であり、かつ、その都市景観美と高級ショッピング・エリアとしての性格ゆえに、世界的に有名なコマーシャル・ストリートとしての地位を確立している。

本稿ではショッピング・ストリートとして著名な当該ストリートが、いかにしてその役割を担うことになったかについて、ナッシュによる計画をもとに考察する。本計画は、もともと、公園と中心地を結ぶアクセスを主体として出発したが、計画初期段階で、単なる幹線通過道路ではなく、店舗が立ち並ぶコマーシャル・ストリートとして開発することが決定されており、その特色ある計画を最初に考案したのがナッシュである。リージェント・ストリートはナッシュによる造成後、19世紀半ばから20世紀を通して何度も改築されており、現在のストリートのありようは、彼が計画・建設した姿から大きく

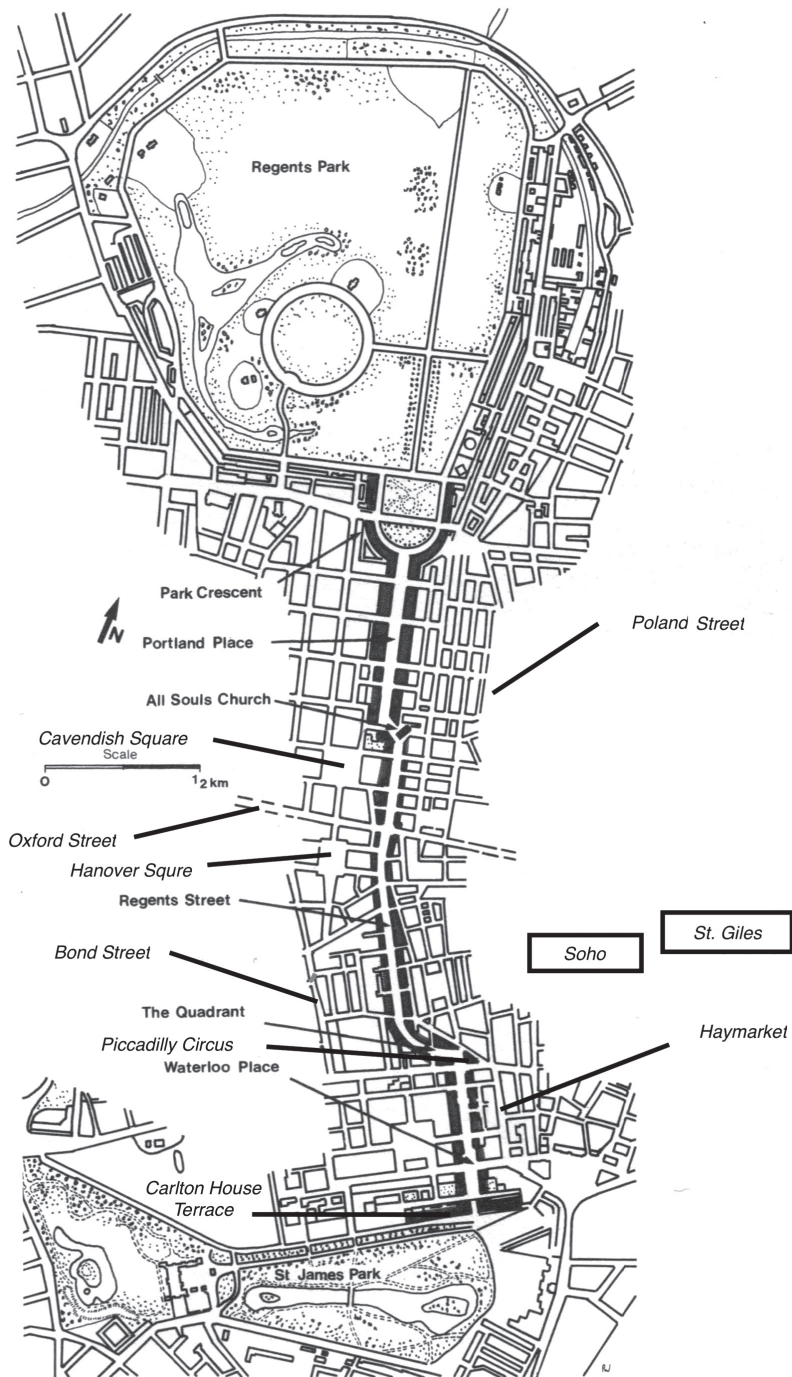


図1 リージェント・ストリート完成図

【出展：Cliff Moughtin, Taner Oc, and Steven Tiesdell, *Urban Design: Ornament and Decoration*, p. 33.】

なお、イタリックによるストリート名と四角で囲んだ地名は筆者による加筆

変化している。されど、計画および建設段階でその性格の方向性を決定したナッシュの功績は、毫も損なわれるものではない。

本ストリート設計については、これまでもいくつかの研究で言及されているが、それらは、その建設過程を王室による不動産経営の側面や、「都市大改造」の観点から考察するものが主だった。たとえば、ドナルド・オルセン (Donald Olsen) は、ロンドンにおけるエステート計画の研究で、王室による不動産経営を論じ、そのなかで本計画について触れている⁴。ジョン・サマーソン (John Summerson) は、ナッシュの業績に焦点を当てながら、王室エステート計画の全体像を描写している⁵。ダナ・アーノルド (Dana Arnold) は、当該ストリート研究がナッシュに偏っていることを批判しながら、本計画の実行にはナッシュ以外にも、伝統的エステート開発方法に詳しい建築家や開発業者の関与が必須であったことを力説している⁶。最近の研究では、ジェフリー・タイヤック (Geoffrey Tyack) が「都市大改造」の全体像を明らかにしながら、本ストリートの建設過程を詳述し、いかに本計画がロンドンの高級エリア、ウェスト・エンド (West End) の発展に寄与したかを論じている⁷。結局のところ、これらの先行研究はいずれも、本計画が伝統的エステート計画の原則に則っていることを前提にしている。しかし、伝統的エステート計画があくまでも賃貸住宅開発計画であることを考えると、商業空間の開発という要素を併せ持つ本ストリート計画を、エステート計画の一環として扱うのはやや無理があり、本ストリート計画は厳密には異なる次元のものと見なすべきである。

一方、商業空間の誕生という観点に立つて、ヴィクトリア朝における消費文化のコンテキストで、リージェント・ストリートについて論じているものもある。デボラ・ノルド (Deborah Nord) やエリカ・ラパポート (Erika Rappaport) の研究がそれで、ヴィクトリア朝ウェスト・エンドにおける消費と流行の発展において、本ストリートの果たした役割について言及している⁸。が、両者ともジェンダー研究の側面に焦点が置かれ、リージェント・ストリートについての記述は限定的である。

伝統的エステート計画と商業空間の建設という二つの要素を併せて論じた研究として、ハーマイオニー・ホブハウス (Hermione Hobhouse) の研究が示唆に富む⁹。彼女はコマーシャル・ストリートの傑作として本計画を位置づけ、計画の発端から建設、幾度かにわたる大改築を経て、21世紀までの発展の過程を追っている。本論では、ホブハウスの研究の視座に立つて、コマーシャル・ストリートとしてのコンテキストでナッシュの計画案を読み直し、それが実際の建築過程においてどのように遂行され、完成直後にどのような空間を形成していったのかについて考察する。さらに、19世紀後半に、本ストリートの存在は、ウェスト・エンドの隆盛と消費文化の発展に大きく寄与することになるが、その基礎がすでに、ナッシュによる立案および建設を通して、完成直後、すなわち、19世紀前半には形作られていたことについても記述したい。

史料は、ナッシュによる計画と建設については、彼の設計図を彼のレポート、および

当該計画を指揮した財務省傘下の森林局（Office of Woods, forests, and Land Revenues）による報告書等と照らし合わせながら分析する。また、完成後の状態については、当時名を馳せていたロンドンのガイドブック等を用いることとする。

第1章 ナッシュによる計画—初期案（1811年）と改編案（1813年）

ストリート計画はもともと、王室パーク・エステート開発計画に付随する形で始まった。パークと中心地を結ぶアクセスの必要性を最初に訴えたのは、前稿で述べた王室パーク・エステート開発の必要性を最初に公に知らせた測量長官ジョン・フォードダイス（John Fordyce）である¹⁰。彼は1793年から死去する1809年までの間、財務省の下で測量長官を務めたが、折しもフランスとの長い戦争が勃発しており、戦費捻出の目的から王室歳入増が急務とされた¹¹。そのような状況にあって、彼は開発が進むロンドンにおいて、まだほぼ手付かずの状態にあった王室リージェンツ・パーク・エステートに目をつけ、その開発を提案したのである。彼は王室歳入増の手段として、王室パーク・エステート開発の必要性を説くと同時に、それを有利に運ぶ手段として、アクセスの必要性、水の供給、下水道の設備、市場建設等、現在で言うところの都市計画の必要性も述べている。とりわけ、アクセスの必要性については、王室エステート計画の成功を左右するものとして最も重視している¹²。

フォードダイスの死去後、当該エステート計画を引き継いだのは、王室領を管理する部局である森林局の3人のコミッショナーたちである。彼らは、局内の2組の建築家トマス・レバートン&トマス・チャウナー（Thomas Leverton & Thomas Chawner）、およびナッシュにそれぞれ設計図を依頼した際、パーク設計図だけでなく、パークと中心地を結ぶアクセス整備の観点からストリート設計図も提出するよう指示した¹³。これはフォードダイスの提言に基づくものであり、両者は1811年にパーク設計図とストリート設計図をそれぞれ森林局に提出した。この結果、いずれもナッシュ案の方が高評価を得たが、財務省は、パーク設計図についてもストリート設計図についても、費用抑制のため見積もりの見直しが必須であるとの見方を示し、森林局を通して、ナッシュに改編を指示した。これにより、ストリート設計図について言えば、1811年の初期案（図2）から1813年の改編案（図3）へと変貌を遂げた。

ナッシュによる初期案、改編案とも、フォードダイスが提言したアクセス整備という課題をしっかりと探究している。実際、南北に走る大動脈をこれほど計画的に造成したのは初めてのことであり、その後のヴィクトリア朝の道路計画の基礎となった¹⁴。しかし、ナッシュは初期案考案の際、当該ストリート計画に別の目的も付け加えていた。それが、コマーシャル・ストリートの建設という一面である。現在、買い物客でにぎわうリージェント・ストリートを見れば、この道路のショッピング・ストリートとしての性質は一目瞭然である。その原点を造形したのはまぎれもなくナッシュであって、彼はその方針を

19世紀前半のロンドンにおけるリージェント・ストリート建設——ショッピング・ストリートの誕生——(芝)

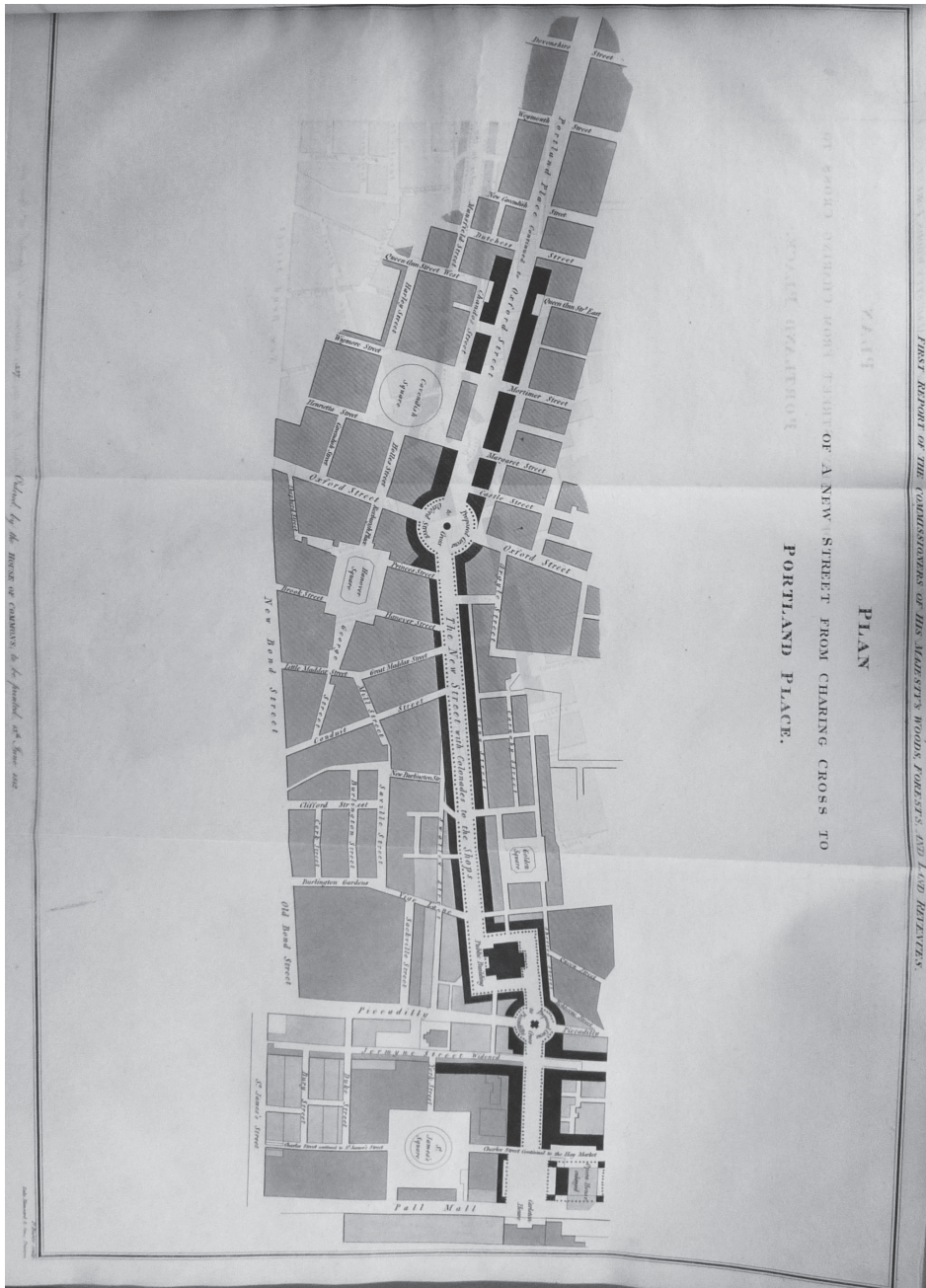


図2 ナッシュによるストリート初期案 (1811)

【出展：First Report of the Commissioners of His Majesty's Woods, Forests, and Land Revenues (1812)】

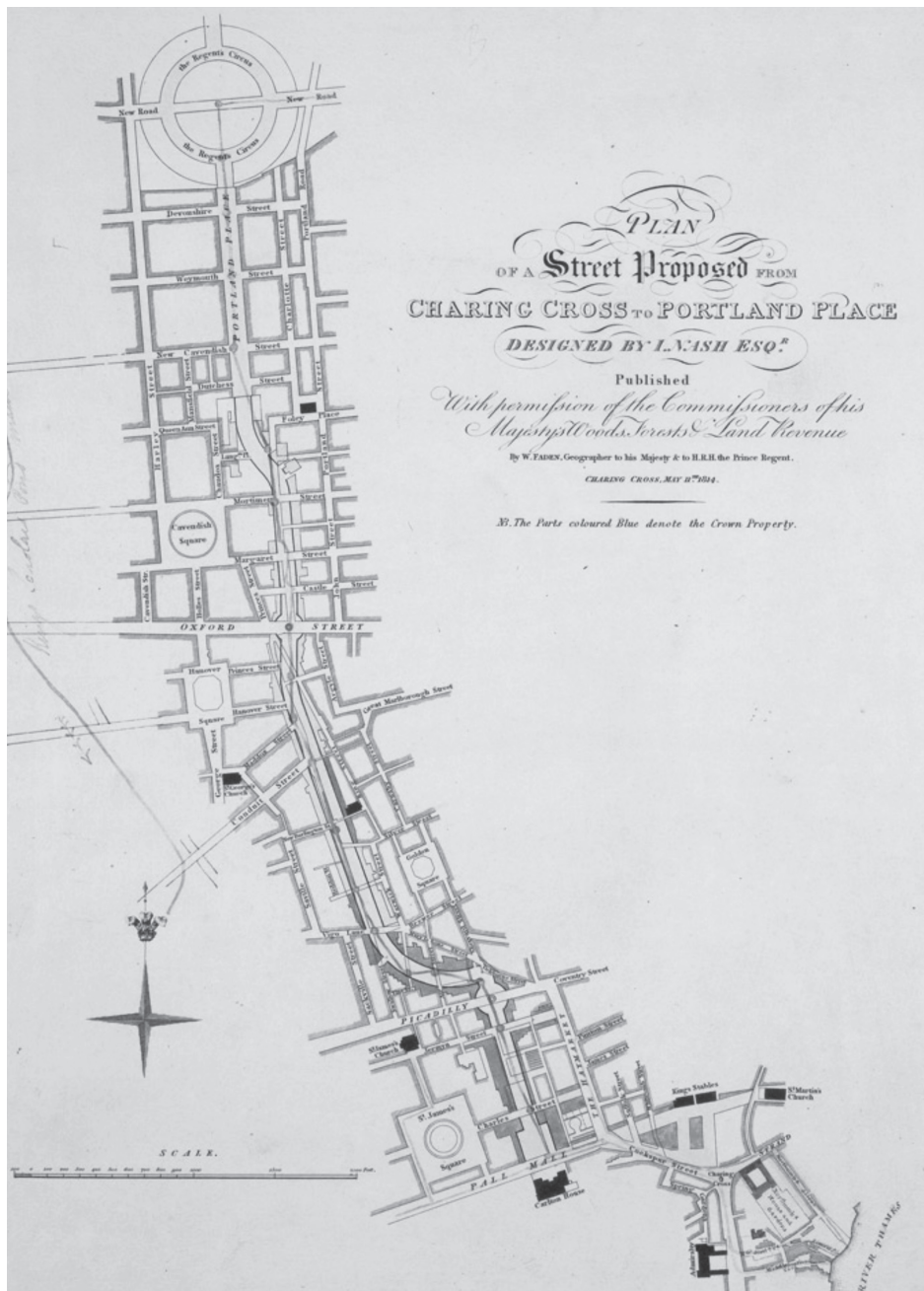


図3 ナッシュによるストリート改編案 (1813)
【出展：British Library, Crace Collection 12.16】

以下のように述べている。

本ストリートが大通りとして建設されると、高級品や流行の品物を売る店舗が通り沿いに建ち並び、流行の流れが新街路に移るだろう。歩道は7フィートではなく15フィート、馬車道はボンド・ストリートの2倍に設計され、全ての流行の店が一堂に会することになるだろう¹⁵。

引き合いに出されたボンド・ストリート (Bond Street) は、リージェント・ストリートができる前から、服飾関係やタバコ等嗜好品関連の高級店が立ち並ぶストリートとして有名であったが、この記述からナッシュは、それを凌駕するような上流階級向けのショッピング街を目指していたことは明らかである。アーノルドも指摘するように、設計図初期案(図2)上には、「柱廊(コロネード、colonnades)を伴った店舗の建ち並ぶ新街路」という表記も見受けられる¹⁶。幹線道路建設という当初の目的に、ショッピング・ストリートの創造という新たな局面を付け加えたこと、しかもそれを初期案から打ち出しているということがナッシュ案のユニークな点であり、これが、単にアクセスのみを考えたレバートン&チャウナー案との大きな違いであった。

ナッシュによるこの方針には、多くの意図が包含されており、おおよそ三つの観点に集約できる。第一に、それによって階級による住み分けを促進しようとしたことである。17世紀以降、富裕層は、手狭になったシティ(The City)から脱出し、ロンドン西部に住居としてタウン・ハウス(town house)を構えるようになる。西部には宮殿や議会もあり、富裕層が西部に集中するに至ってウェスト・エンドが形成された。しかし、そのすぐ東側には、ソーホー(Soho)やヘイマーケット(Haymarket)の貧困地区、さらには、悪名高きスラム、セント・ジャイルズ(St Giles)があり、みすばらしい家屋やいかがわしい店が建ち並んでいた¹⁷。西側の高級エリアと東側の貧困エリアは互いに隣接しており、その境界線はあいまいであった。

ナッシュが初期案で設定したルートは、パーク南に位置するポートランド公爵のエステートを走る大通り、ポートランド・プレイス(Portland Place)の南端に続ける形で、リージェント・ストリートを建設し、オックスフォード・ストリート(Oxford Street)、さらにピカデリー(Piccadilly)を通過して、摂政皇太子の邸宅カールトン・ハウスまで南下させるというものであった。このルートはウェスト・エンドのほぼ東端を縁取るものであり、これより東側の貧困地帯を遮断するのに有効であった。このことは、当該計画以前のロンドンの地図として有名なりチャード・ホーウッド(Richard Horwood)の地図(図4)上で確認するとより鮮明となる。ナッシュ案はオックスフォード・ストリートを越えたところからピカデリーまで当時、南北に走っていたみすばらしくて細長いスワロー・ストリート(Swallow Street)(図4上で、筆者が太線で加筆したライン)に沿って計画されたが、それより西側は住宅地の区画も東側に比べて大きく、多くのスクエアや広い通りがあるのを見て取ることができる。一方、レバートン&チャウナー案は、ナッシュ

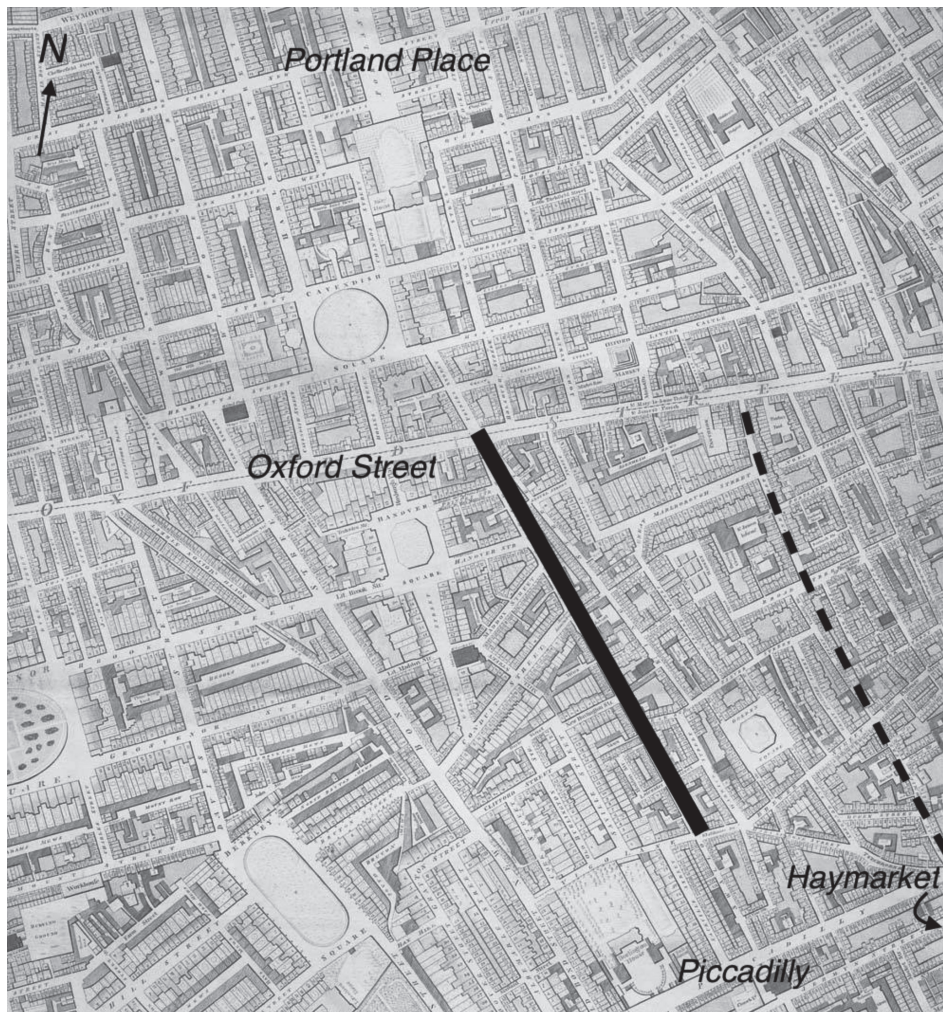


図4 リージェント・ストリート計画以前のロンドン

【出展：Richard Horwood, *Map of London, Westminster and the Borough of Southwark*, 1799.】
なお■■■■■、と■■■■■、イタリック体の地名、方角記号等は筆者による加筆

案よりも東側のルート、すなわち、オックスフォード・ストリートを越えた地点から、ポーランド・ストリート (Poland Street) を南下し、グレート・ウィンドミル・ストリート (Great Windmill Street) を経て、ヘイマーケットを通るルート (図4上で、筆者が点線で加筆したライン) を設定しており¹⁸、これは、ソーホーおよびヘイマーケット一帯を通過することから、ナッシュ案と比較するとスラムや貧困地帯をウェスト・エンドに取り込んでしまうルートであった。

ナッシュが、この街路計画を通して、いかに上流階級の住むウェスト・エンドを貧困層地区から引き離そうとしたかは、彼のレポートが雄弁に物語っている。彼は、本スト

リート計画の目的を「貴族やジェントリーが居住する通りや、スクエアーと、商人や物売りたちによって占められている狭い通りや汚い家々との間に境界線と完全な分離をもたらす」ことと述べている¹⁹。すなわち、きらびやかなショッピング街をソーホーやヘイマーケットに接している小路やみすばらしい家屋、ごみごみとした店々を避けて建設することによって、新街路を「上流階級の居住空間と下層階級の居住区とを隔てる境界線」として機能するように計画したのである²⁰。また、東側から西側への流れを意図的に遮断するため、本ストリートのオックスフォード・ストリートからピカデリーまでの間は東西に横切る小路の数を極力限るようにしている。さらに、ストリートの東側には本ストリートに沿うように、バックストリートが設けられており、商人たちの荷馬車や手押し車をバックストリートに追いやることによって、新街路への侵入を排除しようとしている。「歩道は交差点によって邪魔されず、より劣った家やヘイマーケットの交通は遮断される」としている²¹。

このように、彼の意図したことは、ショッピング街建設を通じて、ウェスト・エンドを貧困地区から完全に分離することにあった。すなわち、東側の貧困エリアがウェスト・エンドに向かって拡大することを防止し、かつ貧困層がウェスト・エンドの住人に交じることを阻止する目的があった。17世紀後半から出現し始めた地域による区分けを鮮明にしたのが、19世紀前半におけるナッシュによる新街路計画であったのである²²。ストリート完成後の地図(図1)を見ると、リージェント・ストリートの西側には、キャベンディッシュ・スクエアー(Cavendish Square)やハノーヴァー・スクエアー(Hanover Square)等、貴族のスクエアーが点在する高級住宅地となっており、他方で、ストリートを挟んで東側には、貧困エリアであったソーホーやヘイマーケット、セント・ジャイルズが隣接していて²³、リージェント・ストリートがその両者を明確に分離していることが見て取れる。

第二に、ショッピング・ストリートの建設は、王室歳入増を図るという意図もあった。フォーダイスから始まったパーク計画は、エステート開発を通して賃貸料徴収によって王室の収入増を目指すものであり、ストリート計画はそれに付随する計画という位置づけであったが、ナッシュのショッピング・ストリートを伴った街路計画は、その街路自体を投機対象としている。ローレル・フリン(Laurel Flinn)も述べるように、富裕層向け高級ショッピング・ストリートは、富裕層を惹きつけることになり、地価上昇につながり、それが賃貸料に反映されるため、必然的に王室歳入増に直結するものである²⁴。しかも、ナッシュは、家屋買収費および補償費をできる限り抑えるため、王室領を通るようルート設定を行っている。特にピカデリー周辺は、王室領に属するみすばらしい小さな家々が並んでおり、それらは王室領以外の個人所有地を買収することに比べて、経費の節減をもたらすのである。ライバル案のルートの大部分が王室所有地ではなく、個人所有地を通るのに対し²⁵、ナッシュ案は最小限の経費で最大のリターンをもた

らす方式を採用している。アーノルドも、「王室は、この大通りの建設を通して、ジョージ4世の住まいであるカールトン・ハウスの価値を高めるとともに、土地の評価額とその賃貸料を上げるという点において、多くを得ようとした」²⁶と述べている。

第三に、美的側面においても、ナッシュのショッピング・ストリートは、ライバル案に比して大きな利点があった。レバートン&チャウナー案は幹線道路としてルート設定をするにとどまったが、ナッシュ案では両サイドに高級店を配したショッピング・ストリートの建設に焦点を当てており、都市に美観を添えるものとして考えていた。ナッシュの初期案(図2)では、前述のとおり、オックスフォード・ストリートを横切る箇所から終点のカールトン・ハウスまで、両サイドともコロネードに縁取られている。コロネードとは列柱を指すが、古代ローマ都市において多く用いられた建築様式である。ナッシュは、雨天の際も買い物客が濡れることのないよう屋根付きのコロネードを設置するとしているが、それには同時に美的目的もあった。また、初期案では、コロネードを伴った店舗以外にも、都市に美観を添える工夫があった。南北に走る直線道路が、オックスフォード・ストリートを横切る交差点とピカデリーを横切る交差点の2箇所に円形広場サーカス(Circus)を、さらに四角形の広場スクエアをその間にレイアウトしており、ショッピング街とのセットで荘厳で優美な都市景観を作り出そうとしたのである²⁷。

ナッシュがこの新街路建設にあたり、何を手本にしたかは、彼のレポートから推測できる。前述のコロネードに見られるように、古代ローマ等の古代都市建築を模範とした新古典主義建築を採用している²⁸。とりわけ、このプロジェクトに大きな影響を与えたのはフランスと考えられる。折しもナポレオン戦争の真っ只中であり、ライバルたるフランス、特にその首都パリの都市景観を超えたいと考えるのは当然であり、まず模倣、次いで凌駕するものを創ろうとしたであろうことはほぼ断言できる。摂政皇太子も、「ナポレオンのパリを超えること」について情熱的に語ったという²⁹。当該計画のモデルとして、先行研究では、パリのリヴォリ通り(Rue de Rivoli)を挙げているものが多い³⁰。リヴォリ通りは、1802年にチュイルリー庭園の北側に東西に走る通りとして計画され、1811年頃に完成しており、ナポレオン一世の都市計画の功績の一つとして考えられているものである³¹。当該通りは、ショッピング街を意図しており、1階にアーケードを伴った店舗、その上に住居部分として2、3階があり、最後に4階と屋根裏部屋という構造になっており、高さ制限があったこともあり、統一感があった³²。リージェント・ストリートも、ほぼ通り全体が1階部分に店舗をもった4階建てで統一されており、また、アーケードの役割を持つコロネードを伴った店舗部分も計画されており、リヴォリ通りとの共通点は多い。しかし、ナッシュ自身はレポートにおいて、具体的なストリートモデルを記しておらず、リヴォリ通りについての記述もない。さらに、ナッシュ自身がパリを訪れたのは、これまで判明しているところでは、1814年、1815年、1818年の三回であり³³、その際、おそらく、リヴォリ通りも含め、パリの都市計画をつぶさに観察し

たであろうが、本計画は、初期案、改編案のいずれも1811年～1813年にレイアウトされており、彼のパリ旅行以前のことであった。けれども、リヴォリ通りの造成計画や実際の工事の様子がイギリスにも伝わったことであろうし、リヴォリ通りを模倣したショッピング街をロンドンに出現させようとしたことはあり得ていいのではないか。

かくして、ナッシュはこのショッピング街計画を通して、東西分断という地理的整備、王室収入増を目的とした財政的整備および都市の美的整備をも行おうとした。これらは全て、ウェスト・エンドの整備ということに収斂される。本ストリートは、一般人のためのものではなく、完全に高級エリアに住む貴族や富裕層のための空間整備だったのである。パークが当初は一般開放を目指したのではなく、ウェスト・エンドの住人のためであったのと同様、本ストリートもウェスト・エンドのための住人のものであった。すなわち、富裕層が優雅に余暇を過ごすためのショッピングの場所だったのであり、意図的に排他的な空間を作り上げたと言える。当然のことながら、ウェスト・エンドとその住人を守るためのナッシュの計画は、下層階級への配慮を著しく欠くものであった。次章で触れるように、ナポレオン戦争で国が疲弊している中で、ウェスト・エンドのみに焦点を当てた計画は、さまざまな場所で批判にさらされることとなった。

前述のとおり、財務省から初期案見積もりの見直し要請を受けて、ナッシュは1813年に改編案(図3)を作成した。改編案は、建設費が£330,754とされており、初期案よりも建築費減を達成できると判断されて、1813年4月に財務省から承認された³⁴。建設費抑制のためにナッシュが変更を加えた主な点は、オックスフォード・サーカスからピカデリー・サーカスまでのコロネードをなくしたこと、およびピカデリー・サーカス周辺にレイアウトされていたスクエアを取り除いたことである³⁵。しかし、彼の設計者としての卓越したところは、この変更を逆手にとって却って美しい景観を生み出したところにある。スクエア設置をあきらめ、代わりに王室領を通るように道路をレイアウトした際、完全な直線道路にすることができなかったため、彼は道路を単に斜めに曲げるのではなく、4分の1円弧を描くカーブとした(図3)³⁶。ゆえに、現在でもピカデリーのこの周辺は、英語で「四分円」を意味するクワドラント(Quadrant)という名称で呼ばれており、本ストリート上のもっとも優美な箇所である。

必要なルート設定に対して、カーブという手法で対応した箇所が、ストリートの起点(北側)でも見られる³⁷。初期案では、ポートランド・プレイスの南端からそのまま続ける形でリージェント・ストリートが始まったが、改編案では、リージェント・ストリートの起点が、ポートランド・プレイスより東側に少しずれたところから始まっており、ナッシュはそこをカーブ状にデザインしている。これは、近隣のポートランド公爵のエステートが誇る高級住宅地キャベンディッシュ・スクエア周辺に住む貴族たちが、当該ストリートが、スクエアのすぐ東側を走ることには難色を示し、その周辺の土地買収が困難となったため、ストリートを1ブロック東側にずらさざる得なくなったことに起

因している。ナッシュは後にストリート建設に際して、このカーブ脇に自身の設計によるオール・ソールズ教会（All Soul's Church）を置き、アイキャッチャー的役割をもたせた（図1参照）³⁸。現在でも、当教会は直線道路が狭い区間で急カーブする短所を目立たせなくする効果をもっている。これらの工夫は、見積もりの修正という指示や地域住民からの不満に臨機応変に対応したナッシュの力量を示している。タイヤックが的確に評するように、ナッシュは「財政的必要性を視覚的優位に転換させた」のである³⁹。以上のように、改編案では、建設費抑制のためいくつかの変更点はあるものの、初期案に見られたウェスト・エンドに重点を置いた上記の三つの観点は、そのまま受け継がれており、特に、美的景観の創造という点については、より顕著になっていると言える。

第2章 リージェント・ストリートの建設過程

1813年にナッシュの改編案（図3）が財務省によって承認された後、ストリート建設に関する法案が議会に提出された。同年、「新街路法」（The New Street Act）が成立し、新街路委員会（the New Street Board）が創設され、建築に係る全ての問題が当該委員会で話し合われた⁴⁰。ここに至って、最初はパーク計画に付随していたストリート計画は、パーク計画と切り離されて、1つの独立した計画として考えられるようになった。尤も、それらはいずれも1811～1826年頃にかけて、互いに補完し合う計画として、並行して建設されたという側面もある。実際、新街路委員会のメンバーはパーク計画を主導した森林局のトップである3人のコミッショナーと同じであり⁴¹、したがって、パーク計画もストリート計画も同じコミッショナーおよび同じ建築家によって計画と工事がなされたことになる。

ストリート計画には、当初から困難がつきまとった。それは、認可が1813年におりたにもかかわらず、予算措置や強制買収に伴う補償問題等により、実際の建設開始が1815年、開通が1819年だったという事実にも如実に現れている。公園計画については、敷地が王室領に属し、しかも、もともと建物が建っていない土地であったため、開発は比較的容易に進んだ。対照的に、道路建設に関しては、王室所有地が全ルートの3分の1程度であり、所有地でない残りの土地を取得しなければならないことに加えて、ほとんどの道路建設予定地が建物付きであったため、その家屋を取り壊す手間ひまなど、公園建設予定地に比して膨大な時間を要することになった⁴²。

当初の予定よりも大幅に増えたのは、時間ばかりでなく費用でもであった。道路建設が正式に認可されるやいなや、新たに任命された新街路委員は道路建設の財源について議論した。法案の成立は本ストリートが公共事業であり、したがって、公的基金の使用が前提となる。この法案はコミッショナーたちに建設費借入の権限を与えており、法案成立後、すぐにナッシュの交渉により、王立為替保険会社（Royal Exchange Assurance Company）から£300,000が当座の資金として借り入れられた⁴³。しかし、すぐに不足を

きたすことが明らかとなり、借入限度額の £600,000 までの借り入れが決定し、1816年12月、その措置がイングランド銀行によって行われた⁴⁴。総額、£600,000のうち£500,000が道路建設に、£100,000が下水道整備に配分された⁴⁵。しかし、この数字は後に非現実的な金額であることが判明し、最終的な費用はそれを遥かに上回るものとなった⁴⁶。

公的基金で賄いきれなかった費用については、民間資本に頼らざるを得なかった。と言うのも、建設時は折しも、1815～1819年のナポレオン戦争後の不景気の直撃を受けており、王室財政にも余裕がなかった⁴⁷。したがって、本ストリートは公共事業でありながら、民間事業ともなったのである⁴⁸。ここに至って、地主貴族たちによる伝統的エステート開発および経営手法が模倣されることになる。伝統的エステート開発においては、大地主たちは、自分たちの所有するエステートの土地を建設用地として、主に建設業者からなる借地人 (leaseholder) に貸し出して借地料 (ground rents) を得た。これは、建設地賃 (building lease) と呼ばれているもので、99年を上限とした長期契約でなされる場合が多かった。建設業者たちは、住宅地を整備した上で、そのリース権を売却して利益を得た。賃貸期間終了後は、土地はそこに借地人が建設した建物を含めた形で、地主に返却されるという制度であった⁴⁹。地主にとってきわめて有利なものであり、これを繰り返すことによって、地主の利益と権利はますます強化していったのである。本ストリート建設では、公的基金に加えて、民間資本が使われたが、王室がいわば地主となって、もともと王室領だった土地のみならず、強制買収によって得た土地も含めて、ストリート建設に必要な土地を区画に分けて、複数の建設業者に建設地賃としてリースに出し、建設を進めていったのである。

ナッシュは、コミッショナーの命を受けて、地主たる王室の代理人的な役割を果たした。すなわち、土地調査を行い、強制買収を取り仕切り、土地の区分けを行い、複数の建設業者を選定してリースに出し、全体のデザインを取り仕切った上で、彼らに仕事を割り振り、監督した⁵⁰。

彼が手始めに行ったことは、強制買収と取り壊しであった。「新街路法」は、コミッショナーに道路建設に際して必要な土地の強制買収の権限を与えており、代理人ナッシュがそれを行ったのである。改編案におけるルート上で、全部で741軒の家屋が取り壊しの対象となったが、そのうち、王室所有の不動産は約半分の386軒で、個人所有の家屋は355軒であった⁵¹。1814年6月以降、これらの家屋に関して買収が行われたが、所有者たちからの猛反対に遭い、その補償費は莫大な金額に上った⁵²。フリンは、特に、ピカデリー周辺の王室領に属さない土地の強制買収に焦点を当て、立ち退かされる人々の苦悩と抵抗について論じている⁵³。王室やナッシュによるウェスト・エンドの開発に主眼を置いた当該計画は、その対象である上流階級だけが恩恵にあずかれるものであり、移転を余儀なくされるピカデリー周辺に住む平民たち (leaseholder や tenant) の権利を著しく侵害するものであった。それは物理的に住環境を損なうばかりでなく、彼らがそこ

で行っていた仕事を奪うことも意味した。それゆえ訴訟もいくつか起こされたが、王室側はそれを退け、ストリート建設は進められていったのである⁵⁴。

強制買収と取り壊しが多く困難を抱えて終了した後、ナッシュは、土地の区分けを行い、複数の建設業者を選定する段取りを整えた。公共事業としての本計画においては、建設業者の選定は競争入札で行われるのが筋であり、1815年頃からいくつかの区画が入札に付された。しかし、信用できない建設業者が、低い金額で応札することがたびたびあったため、入札はあまり行われなくなった。代わりに、ナッシュが新街路上のそれぞれの区画の長さに応じて価格を固定し、それぞれの区画に対して建設業者が問い合わせを行うという方式が採用された⁵⁵。

オルセンが述べるように、新街路計画は、王室地所の収入を高めるという投機的開発であったが、それは、また、建設業務に参画した建築業者 (speculative builders) にとっても大きな利益をもたらすものであった⁵⁶。とはいえ、本ストリートは全長約1マイル (約1.6キロメートル) にも及ぶ超大型建設事業であったため、利益も高い分、元手となる資金も莫大となり、したがって、当該事業に参入できる資力や能力を有する建設業者は限られていた。主だった業者は、ロンドンにおける建設業者として有名だったジェームズ・バートン (James Burton) とサミュエル・バクスター (Samuel Baxter) の二人である。彼らは、ロンドンでの著名な地主貴族のエステート開発に携わった経験があり、このような大事業を行うには最適な建設業者であった。前者は、アーノルドが論じているように、ブルームズベリー (Bloomsbury) のラッセル・スクエア (Russell Square) 開発で名声を博しており、後者もエステート開発のノウハウを知り尽くしていた⁵⁷。彼らは、同時期にリージェンツ・パーク内部のヴィラ建設や、周辺のテラス・ハウス建設においても、建設業者としてリースを得、実際の建設業務に携わることになる。

当該ストリート建設全般において、ナッシュが全体的なデザイン方針を決め、区画ごとにバートンやバクスターが買い取り、ナッシュとやりとりしながら、全体を仕上げていった。しかし、時に、彼らが個々の建物のデザインを手がけることもあった。当該ストリートに当初建てられた建築物は、大改築により現存するものが少ないこと、および個々の建物における当時の詳しい記録が残っていないことにより、デザインに対するバートンやバクスターの関与がどれほどのものであったかを正確に知るのには難しい。いづれにせよ、ナッシュばかりでなく、バートンら建設業者もそのような業務を請け負うだけの力量があったということは記憶されていい。実際、アーノルドは本計画のデザイン設計において、バートンの果たした役割を大きく評価している。バートンが建設を請け負った個所は、リージェント・ストリートの起点 (北端) 近くの295-319番地 (ストリート西側)、171-195番地 (西側)、133-167番地 (西側) 17-25番地 (西側) および132-154番地 (東側)、106-128番地 (東側)、4-12番地 (東側)、さらに、ストリート終点近くのウォータルー・プレイス (Waterloo Place) である (図5参照)⁵⁸。一方、バクスターは、オッ

クスフォード・サーカスのほとんどの建設を手がけた。ナッシュ自身が手がけた唯一の区画はクワドラントである。これは、前述のように、本ストリートの目玉であり、デザイン的にも建築的にも趣向と工夫が必要とされるデリケートな区画であるが、おそらくそれゆえにだれも名乗りをあげなかったため、ナッシュ自身が手がけざるを得なかったのであろう。

以上のように、計画段階においてだけでなく、建設段階においてもナッシュの果たした役割は小さくはない。しかも、ショッピング・ストリートとしての建設の成功の鍵はやはり、ナッシュによる全体的な建築デザインの秀逸性にあると言うべきであろう。当該計画は、伝統的エステート開発の基本に則ってはいるものの、通常のエステート開発における住宅建設とは一線を画しており、ナッシュは、ショッピング・ストリートとしてふさわしいエレガントで、かつ、都市景観に美観を添えるような建築物の建造を全体的なデザイン方針として打ち出したのである。

当該方針については、前述のように、個々の区画がそれぞれの建設業者によって仕上げられたため、完全に一致していないものの、新古典主義的な建築様式で一定の統一感が醸し出されている⁵⁹。また、建物はほとんどがレンガの上にバース・ストーン（Bath Stone）色のスタッコ（stucco）による漆喰化粧を施しており、これも、外観に統一感を与える要因となっている⁶⁰。オルセンによれば、スタッコは、「石材を模倣しているかぎりではごまかしが見せかけ」であり、批判も多かった⁶¹。しかし、贅沢で美しい装飾を可能にしたという点で、スタッコは、ショッピング・ストリートとしての当該ストリートにはぴったり合致したのである。

建築的統一性および建築美が、ショッピング街としての資質も十分に兼ね備えていた点は重要である。計画段階からショッピング・ストリートとすることは、その設計図にもレポートにも盛り込まれていたことであるが、実際の建築過程においてもその点はしっかりと反映されている。すでに存在していたボンド・ストリートに対して、新しく造られたリージェント・ストリートが決定的に優位だったのは、オルセンが指摘するように、前者が個人の家を店に改造した物件の集まりだったのに対して、後者は最初から住宅ではなく小売店として計画された商店街として誕生したことである⁶²。したがって、デザインや機能において、後者の方がはるかに統一感と一貫性があった。リージェント・ストリートは、広々とした散策空間、変化に富む景観、豪華絢爛で贅沢な装飾を伴った化粧漆喰の建築物、高級品を売る小売店の数々等、これら全てを伴った商店街がロンドンで最初に誕生したことを意味した。ナッシュによる建築は、彼の計画同様、ロンドン随一のショッピング街の形成に一臂の力を貸したのである。

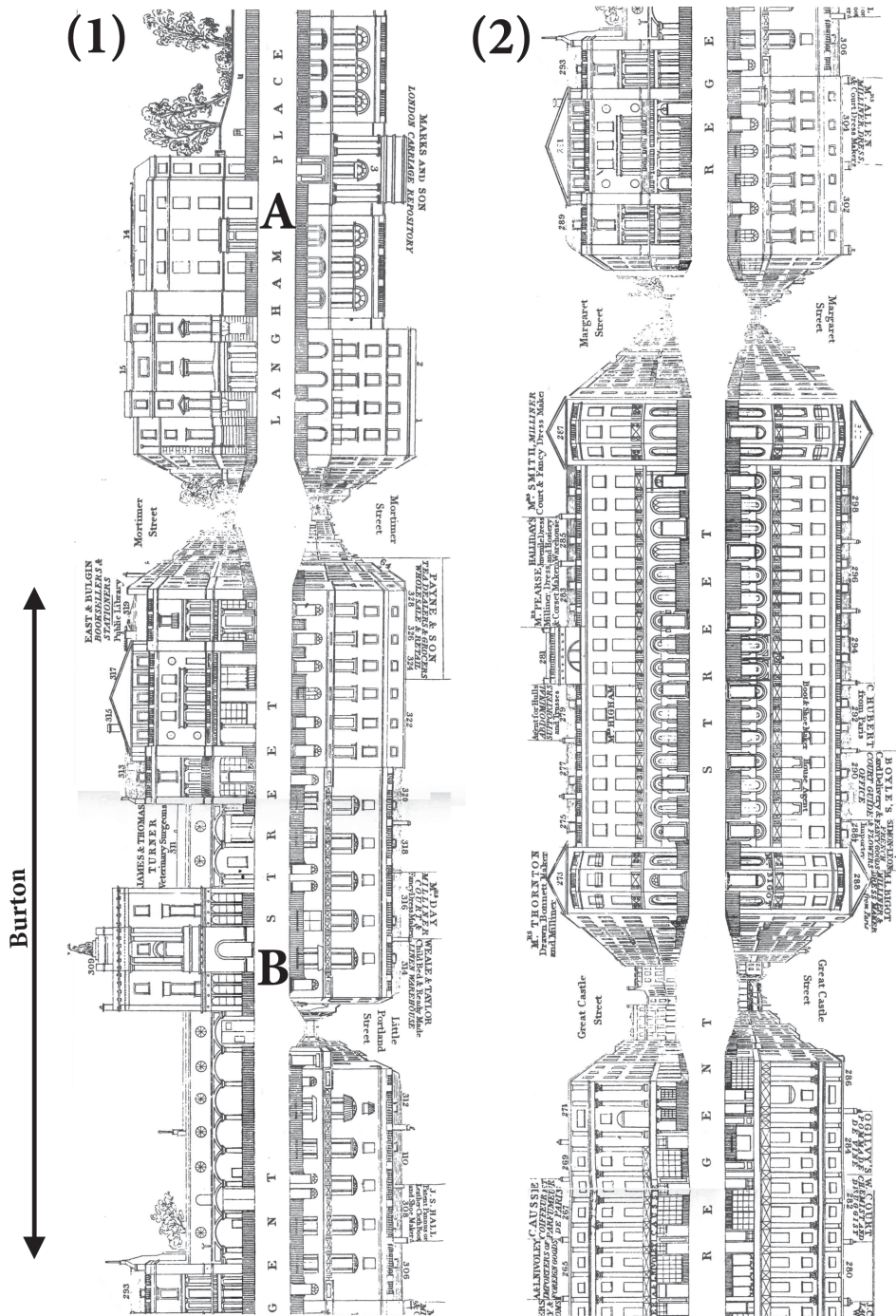


図5 タリスのストリートビューによるリージェント・ストリート完成図 (1838)
 【出展: John Tallis, *Tallis's London Street Views 1838-1840*】

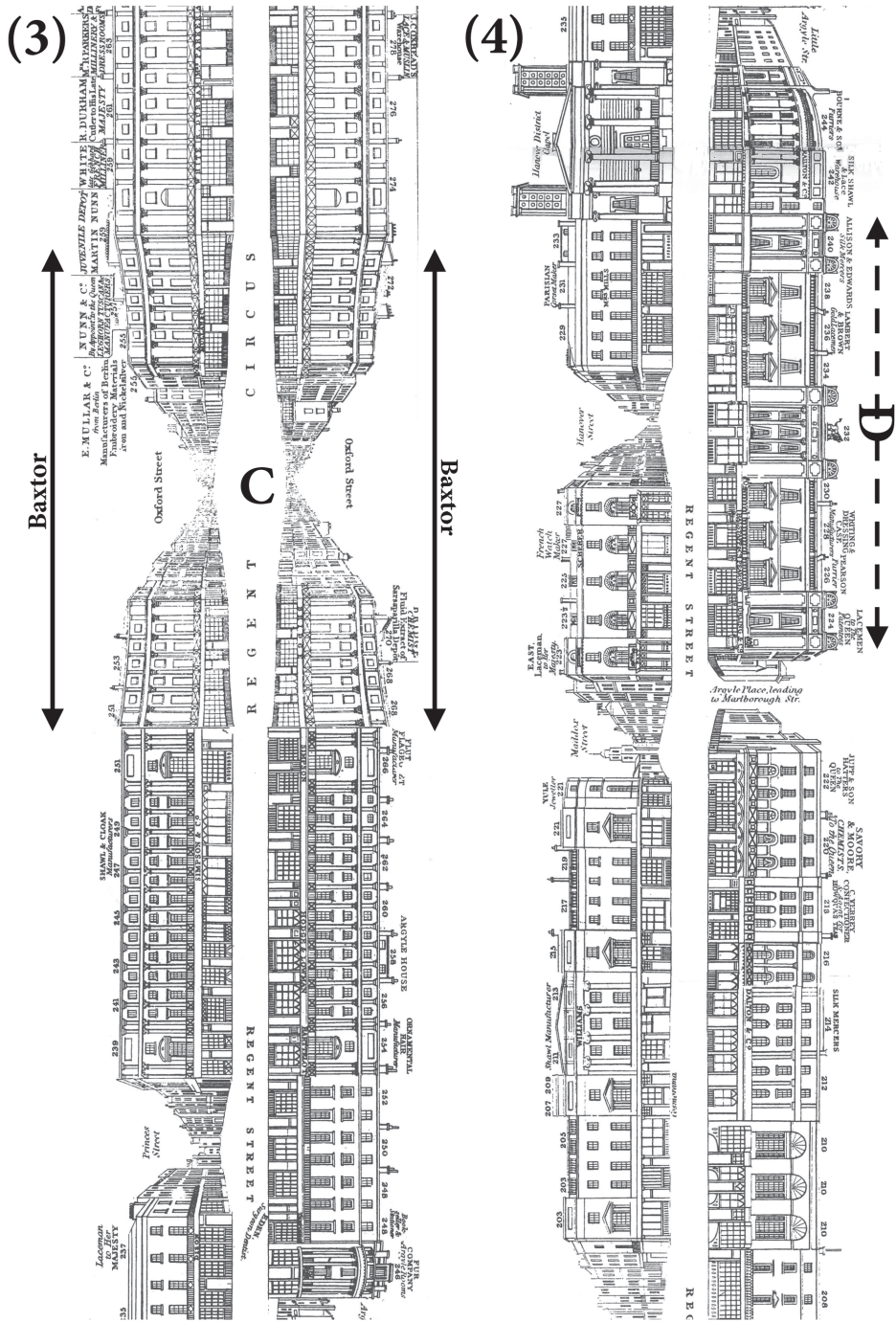


図 5

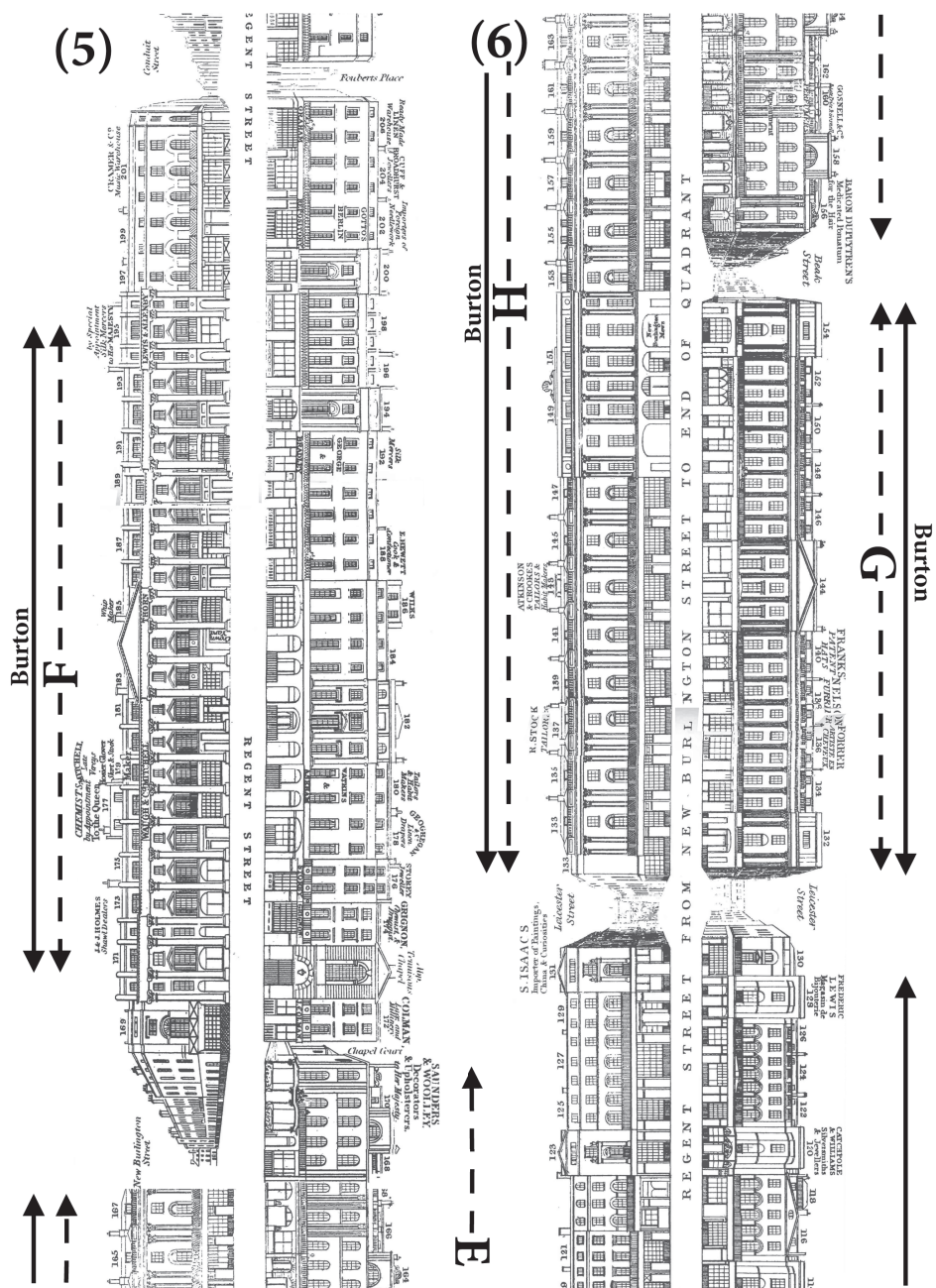


図 5

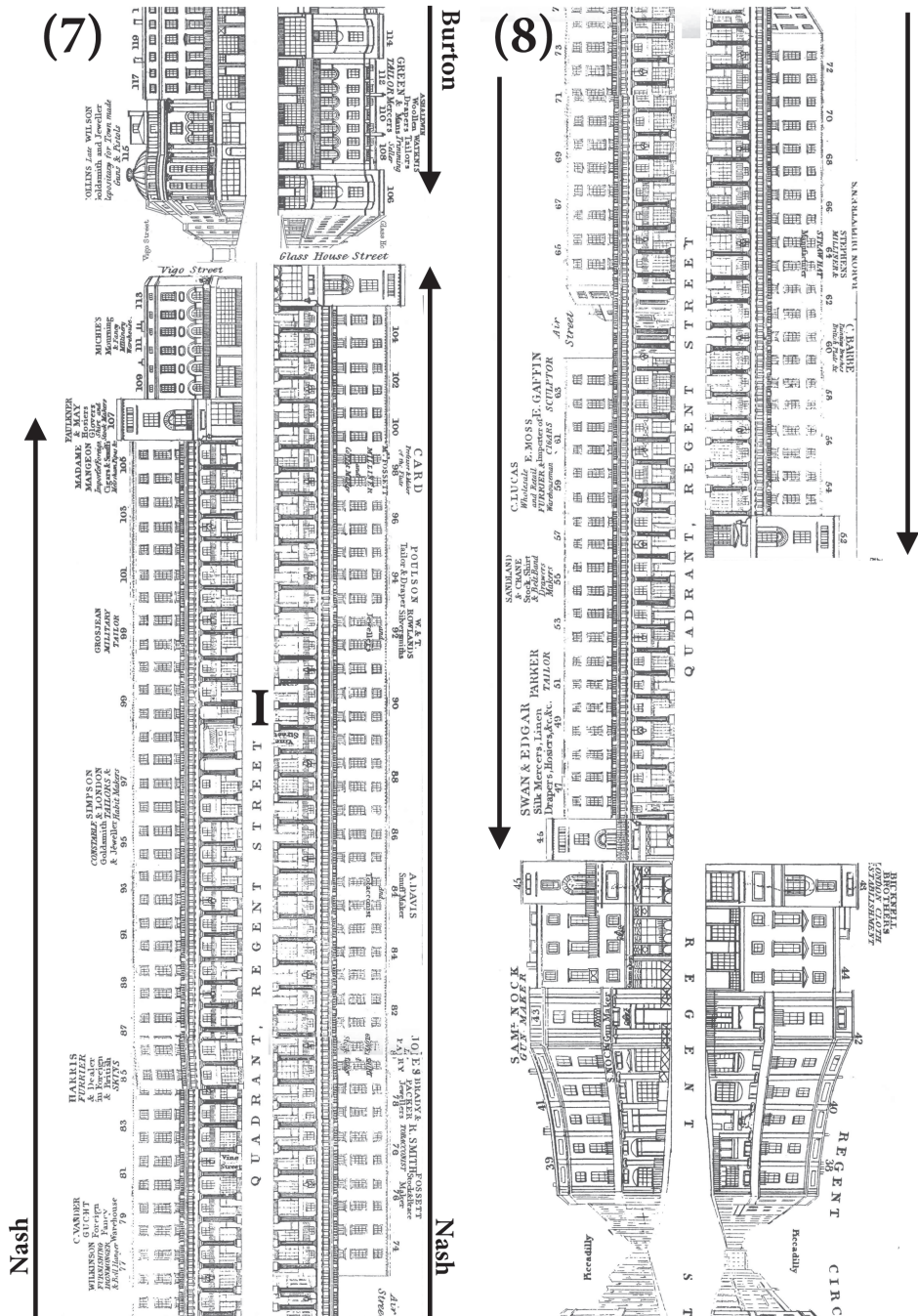


図 5

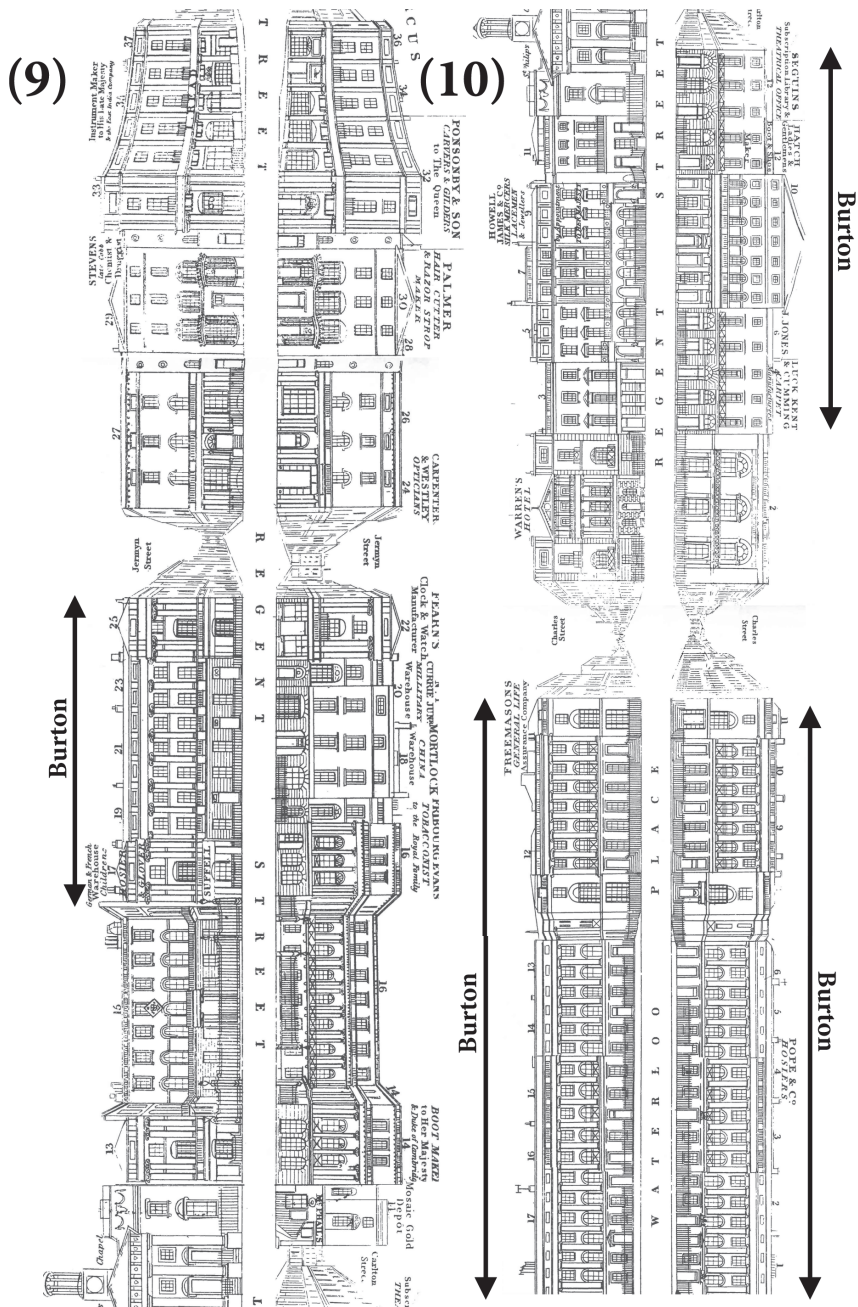


図5

リージェント・ストリートの部分だけ抜粋し、(1)～(10)の順に、北から南へと並び直した。(8)で一部空白の箇所があるが、タリスのオリジナルがそうになっているため、空白とした。また、それぞれの区間を担当したビルダーを、 \leftrightarrow 、 \leftrightarrow 、 \leftrightarrow のように地図上に明示し、さらに、本文中に出てくる区画や建物の説明のため、A～Iのアルファベットを添加した。(特定の建物群の説明には<----D---->のように範囲を加筆)

第3章 リージェント・ストリートの完成

ーガイドブックから見るショッピング・ストリートとしての性格

都市計画について評価する際、それがどのように計画され、建設され、使用されたかの過程を追うこともまた枢要である⁶³。完成直後から現在まで、ショッピング・ストリートとしての本ストリートがどのように使用されてきたかは次稿に譲るとして、本稿では、完成直後から10年ほどの間にどのような空間が形成されていたか、また、ナッシュがショッピング・ストリート建設に籠めた三つの意図がどのように達成されていったかという点について、以下に見ていきたい。リージェント・ストリートは19世紀後半から20世紀にかけて何度か大改築が行われたため、ナッシュによる建築物はほとんど残っていない。が、ここで着目したいのは、彼の建築物自体ではなく、彼が計画したストリートが完成後にどのような意味をもち、どのようなスペースを形成していったか、すなわち、後のウェスト・エンドのあり方にいかに影響を与えたかという点である。

計画や建築過程の考察とは異なり、当時の様子を知るのには、政府文書ではなく、ガイドブック等、都市案内を主眼においた出版物が大いに参考になる。18世紀以降、ロンドンに関する記述として、歴史的記述と地誌学的記述を併せて記したガイドブックが出だした。19世紀前半に書かれ、後のガイドブックでもよく言及されたものがいくつかあるが、リージェント・ストリートの記述が豊富なものとして、James Elmes (ジェームズ・エルメス) による *Metropolitan Improvements* (1827) と John Tallis (ジョン・タリス) の *London Street Views* (1838-1847) を挙げることができる⁶⁴。写真技術が発達し始めた19世紀半ば以降から世紀の変わり目のストリート大改築までに、撮影されたストリート写真は何点か残っており、改築によって失われた建築物の当時の様子をしのぶことができる⁶⁵。しかし、ストリート完成直後から10年後くらいまでの初期の様子はエルメスとタリスのガイドブックから見るのが妥当であろう。両者とも多くのイラストレーションがあり、いずれも当時、よく知られたガイドブックであったが、それぞれに特徴がある。エルメスは建築家であり、建築様式やデザイン等の記述に富んでおり、挿絵も挟まれている。他方で、タリスのものは、ロンドンの主要な通りについてのストリート・ビューとなっており、通りに沿って描かれた立面図 (street elevation) からは、建築物の様式等が見て取れるだけでなく、店の名前等も記されていることから、当ストリートについても当時の状況を窺い知ることができる。特に、当ストリートの立面図現物が1点を除いて現存していない状況において⁶⁶、当時の街路の様子を立体的に捉えることを可能にしているという点で貴重である。

タリスのストリート・ビューはそれぞれのストリートについても簡単な記述を掲載しているが、リージェント・ストリートについては、「主に宮殿のような店々で成り立っており、その広々とした華やかな窓には、近隣の富と流行の世界が日々必要とする、最

も見事な品物が展示されている……。この通りは、全体として、豪華で威厳のある風格を帯び、多くの建築的特徴と多様性を保持している……。夏の日午後は、華麗な馬車と優雅な服装をした歩行者が、われわれのすばらしい首都の富と趣を表象している」と述べている⁶⁷。この記述からも、ナッシュがストリートに籠めた三つの意図のうち、住み分けについては十分に達成されていることが明らかであろう。富と流行を享受でき、優雅な装いをした上流階級がこの通りを闊歩しており、それ以外の者は除外されているからである。また、王室歳入増についても、オルセンが、ストリート完成10年後に行った調査で、このストリートの地代が三分の一上がっただけでなく、周辺の地価も上昇したと述べていることから⁶⁸、ナッシュの企図したとおりとなっていると言える。

ナッシュの三つ目の意図である美的空間の創造という点についても、タリスのストリート・ビュー（図5）⁶⁹とエルメスの記述を併せて分析すると、ストリート完成直後から統一感のある街並みが出現し、すでに多くのビジネスがこの通り沿いに繁栄していることが見てとれる。ナッシュがポートランド・プレイスの南端とリージェント・ストリートの起点（北端）のずれに対して、カーブをレイアウトし、そこに自身の設計によるオール・ソールズ教会を置いたことはすでに述べたとおりである。タリスのストリート・ビューは、当教会をちょうど過ぎたところから始まっており、当教会は描かれていないが、エルメスは挿絵（図6）と記述で説明している。尖塔が鋭すぎるほどに飛び出しているデザインに対して、当時、非難が続出したが、エルメスは「中心にある円形の塔がポーチコ（柱廊式玄関）から突き出ており、頑丈で印象的である……。形式においても調和においても美をもたらしている」として絶賛している⁷⁰。当教会は、本ストリート上において、ナッシュの設計オリジナルのまま現存している数少ない建築物である。

当教会のストリートを挟んで向かい側（ストリート西側）には、かつて、ポートランド公爵と眺望権を争ったフォーリー卿（Lord Foley）のフォーリー・ハウス（Foley House）が建っていたが、リージェント・ストリート建設の際、フォーリー・ハウスは取り壊され、かわりに、ランガム・ハウス（Langham House）が建てられた。ゆえに、そこはランガム・プレイス（Langham Place、図5上のA）と呼ばれている⁷¹。エルメスは、住宅地のポートランド・プレイスに対して、このランガム・プレイスから先、すなわちリージェント・ストリート（図5上のB以南）は、「商業地区」となり、ナッシュの「建築様式は別の外観」（98）を呈し始めたと述べる。そこでは、「近隣の富と流行の世界が日々必要とする、最も見事な品物が展示されている広々とした華やかなショーウィンドーのために設置された大きく開いた立派な正面と、首都に一時的に滞在する訪問者用の家具付き賃貸物件である、上階部分の豪華なアパートメントのエントランスのためのプライベートな大きな扉が流行りの特色」（98）となっていると描写している⁷²。この記述から、1階を豪華な店に、2階を紳士、特に独身紳士の賃貸用住宅にというナッシュ

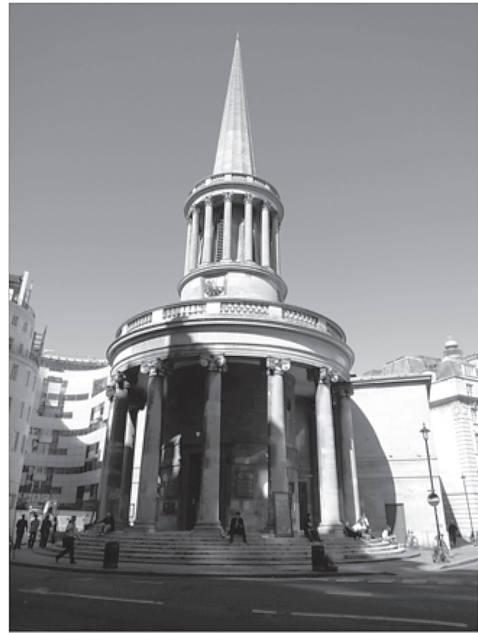


図6 ナッシュ設計によるオール・ソールズ教会と現在（筆者撮影）

【出展：James Elmes, *Metropolitan Improvements; or London in the Nineteenth Century*, 1828】

の計画時からのアイデアが実行に移されていることが分かる。また、これらの地域は、第2章でも述べたように、パートナー建設業者たちに高い地代で貸し出され、建築されたため、結果として完成後に貸し出された「家々の家賃はそれに準じて高く」（98）、したがって、品物が高くたくさん販売されることによってこそ、店主や小売商人たちが利益を得ることができた。また、店舗の建築は、「ファッションや展示されている商品に合わせて変化させることは可能である」（98）とも述べられており、流行のファッション用品に主体が置かれていることも記されている。

店舗の建築様式は、「様々」（98）であり、これは、区画ごとに違う開発業者によって開発されたことに主に起因するのだが、概ね4階建てで高さがそろえられており、建築様式も「パツラーディオ（The Palladian）様式か古代ローマ（ancient Rome）様式に似たもの」（93）、いわゆる古典主義（classical style）が多い。それは、タリスのストリート・ビューからも窺うことができる。また、どの区画も、通常、古典様式に見られるように、最上階の屋根裏部屋部分のすぐ下にコーニス（cornice）と呼ばれる軒蛇腹が置かれており、その点も統一されている。また、コーニスより上、すなわち、最上部の建築様式については、「イタリア派の様々な特色」（99）を表現していると述べられており、タリスのストリート・ビューにおいても、コーニスの上は単に屋根裏部屋になっているもの

もあれば、古代建築における三角形の切妻屋根であるペディメント (pediment) が取り付けられている区画もあり、多種多様である。エルメスは、この上層部の多様性を「ピクチャレスク」(picturesque) (99) と表現し、これは「実にナッシュの卓越した箇所であり、リージェント・ストリートの荘厳なデザインが旅行者や外国人の賞賛を得る芸術的部分である」(99) と高く評価している。多くの建設業者たちが参画し、したがって、建築様式が多様性に富むにも拘らず、ナッシュの統括により、それがうまく調和している点を評価しているのであろう。

リージェント・ストリートが東西に走るオックスフォード・ストリートと交差する地点は、丸い広場オックスフォード・サーカスとして円形状に建設された (図5上のC)。東西に走るオックスフォード・ストリート自体がリージェント・ストリートよりもだいぶ前に確立されており、主要交通ルートでありながら商業の要でもあった。したがって、交差するこの広場も「豪華さと十分なスペース、空気の循環」(99) をもって建設され、エレガントかつ利便性にすぐれている。オックスフォード・サーカス周辺およびさらに南下した区画は、「コリント (Corinthian) 様式」(101-2) で豪華に建設されている。同様式は古典建築の一形態であり、円柱とアカンサスの葉を象った柱頭がその特徴である。タリスの立面図を見ると、1階部分の店より上の2、3階の居住部分に円柱が前面に張り出した形で取り付けられている。柱は1本か2本が組みになって配置されている。

オックスフォード・サーカス以南を過ぎても、「非常に洗練されて華やかに陳列された店舗」(101) が続くが、エルメスが特に細かく描写しているのが、アーガイル・プレイス (Argyll Place) 近くの東側1区画224-240番地 (図5上のD) である。ここは「一続きの華やかな店舗」であり「1階部分のショーウィンドーとその間に位置する戸」が、その上に掲げられ、バルコニーの役割を果たす欄干とともに、建物を構成している。その1階部分は上階の居住部分にとって「適当で、便利で、見事な土台」(110-11) となっていると描写し、「非常にピクチャレスクな構造」(113) であると評価している。ここは、後に百貨店ディケンズ&ジョーンズ (Dickins and Jones) の店舗が置かれることとなる⁷³。

次に、エルメスが力を籠めて描写するのは、東側の156-170番地 (図5上のE) である。これは、ロイヤル・アカデミーの建築の教授であり、イングランド銀行を建築した建築家としても有名であったジョン・ソーン (John Soane) によってデザインされた区画である。エルメスは、「幅が広くそびえ立つ区画」(115) と描写している。この建築に対して、ある悪意をもった批評家が「ソーンは新しい古典様式を生み出した」と批判したため、ソーンが彼を訴えるという事件も起きている⁷⁴。

エルメスの記述にはないが、前章で触れたパートンが担当したいくつかの区画も華やかな店舗として完成していることが、タリスのストリート・ビューから見てとることができる。ソーンによる建築物の向かい側、西側の長い区画171-195番地 (図5上のF) とソーンによる建物の隣に位置する、東側の区画132-154番地 (図5上のG) は、三角

19世紀前半のロンドンにおけるリージェント・ストリート建設——ショッピング・ストリートの誕生——(芝)

屋根のペディメントと張り出した列柱を持つ古典様式の美しい店舗である。また、西側の133-167番地(図5上のH)も華やかな店舗である⁷⁵。

ナッシュが唯一建設を請け負った区画であるクワドランツについても、タリスのストリート・ビュー(図5上のI)とエルメスによる挿絵(図7)から、統一された建築美を表出していることが窺える。湾曲はルート変更の必要性から生まれた苦肉の策であるが、ナッシュはそれを四分円弧状にレイアウトすることによって美的空間の創造へと昇華させたのは先に述べたとおりである。彼はこの部分のカーブにあわせてコロネードを伴ったアーケードを設置している。コロネードは、ナッシュがその初期案において、雨天の際の客への便宜として打ち出した工夫であったが、財政的理由から一旦破棄されていた。しかし、最終的にナッシュは、クワドランツの部分に復活させたのである。雨天用に設けられた1階部分の列柱と屋根が、同時に2階部分のバルコニーの役割も果たしているのを見てとることができる。コロネード自体は、1848年に取り壊されたが、クワドランツは建設時から、当該ショッピング・ストリートの中心的存在であった。

クワドランツはピカデリー・サーカスで終点となるが、サーカスを越えてリージェント・ストリートの終焉部からウォータルー・プレイスまでは、保険会社や銀行、広告代理店、弁護士事務所、馬車会社、鉄道会社、蒸気船会社等のオフィスや、クラブ、ホテル等が多く建設されている。商店についても、宝石商や香水商、タバコ商、ブーツ商、仕立商、楽器店等いくらか存在しているが、これまでのストリートの様相とは趣が異なっている。しかし、全体として、ストリートはショッピング街として完成を遂げたと言える。

タリスのストリート・ビューは、建物の番地が明記され、その賃貸者の名前やそのビジネスもところどころ記載されている。さらに、リプリント版には巻末に全番地について住所氏名録(street directories)も添付されている⁷⁶。それらを参照すると、当ストリートにおいて、完成後10年間で、服飾および装飾品を中心とした流行とファッション関連の商売が確立されていたことが明白である。特に、仕立屋、絹物商、毛織物商、レー



図7 ナッシュによる設計当時のクワドランツとその現在(筆者撮影)

【出展: James Elmes, *Metropolitan Improvements; or London in the Nineteenth Century*, 1828】

ス商、毛皮商、帽子屋、手袋屋、装身具店、靴屋等のファッション関連の商売が中心を占めていた。男性洋品に特化した店もあったが、ドレス商人、婦人用帽子、襟飾り職人、コルセット職人、ボンネット職人等、ショール商、香水店等女性用ファッションの方が隆盛であった。さらに、宝石商、金銀細工商等も多く見られた。19世紀後半、イギリスでは百貨店の隆盛を見るが、その前身は主に衣料品店であった。リージェント・ストリートにも19世紀後半から20世紀前半にかけて、いくつかの百貨店が登場するが、ファッション関係の小売店が立ち並ぶ様から、百貨店が発展する萌芽がすでに完成直後のストリートに現れていると言ってよい。衣料品以外の商売ももちろん繁盛していた。食品については、ワイン商や菓子店、紅茶商、タバコ屋等、嗜好品や輸入品等の店があり、他にもランプ、ガラス製品、陶磁器等を扱う店や、家具店、内装業者、美術商、楽器店も存在した。いずれも、高級品や贅沢品専門の店舗であったことは当ストリートの性格を如実に物語っている。もちろん、本ストリートには店舗以外の建物もいくつかあり、前述のように、特に、リージェント・ストリート終点近くには、オフィスやクラブ等の建物があった。また、ストリートを通して、教会やホテルも複数存在していた。しかし、それらも、ショッピング街に溶け込むように、同じ区画の店舗と同じような建築様式で建てられていたという点も付け加えておく必要がある。以上のように、ナッシュがこのショッピング・ストリートに籠めた意図は完成直後から10年の間には、概ね達成されていたと言える。

おわりに

すでに述べたように、ストリートは完成後19世紀を通じて何度か大改築が行われ、ナッシュの建築した建物はほとんど残っていない⁷⁷。最初は、1848年にナッシュによる建築の目玉であったクワドラントのコロネードが撤去された。列柱のせいで、陰鬱になり、夜には売春婦までがはびこったりするようになったからというのがその理由である。また、19世紀終わりには大改造が行われた。当時の建物の高さは現在の建物の高さよりも低く、拡大していくビジネスに対応しきれなかったため、全体を高くし、同時に、建築自体をやり直したのである。現在、建設当初から残っているものはわずかであり、特に、ナッシュの手がけた建築物としては、オール・ソールズ教会ぐらしか現存していない。また、ここで商売を構える店々も、その後、19世紀を通じて移り変わって行った。前述のように、計画の成功によって地価が高騰したため、高価な賃貸料をまかなえるような繁盛したビジネスしかここに居を構えることはできなかった。しかし、ルートとストリートレイアウトはそのまま残された。特に、クワドラントのカーブをはじめ、ナッシュが趣向を凝らしたユニークな景観は未だ健在と言える⁷⁸。また、このストリートは、いつの時代においても、その時々流行の最先端の店が立ち並び、それが現在まで続いている。

19世紀後半における消費文化の発展について、ラバポートは、「リージェント・ストリートは……王室の権力と名声を示すものであったが……それは、ウェスト・エンドのショッピング街の中心となり、また、貴族による消費と誇示を公に示す拠点となった」と評している⁷⁹。この点について、ナッシュだけの功績に帰すことはできないが、彼自身が計画段階でそれらを念頭に置いていたことは重要である。19世紀後半を通して、本ストリートがどのような変化を遂げ、いかに消費文化の中心地としての地位を確立していったかは次稿に譲るとして、現在まで続く一流消費空間としての名声の元をたどるならば、結局のところ、ナッシュのアイデアとデザインに帰結するのである。

¹ Thomas Hall, *Planning Europe's Capital Cities: Aspects of Nineteenth Century Urban Development* (London and New York: Routledge, 1997) p. 86; James Anderson, "Urban Development as a Component of Government Policy in the aftermath of the Napoleonic War," *Construction History* 15 (1999): p. 23.

² 松村 昌家「都市文学の誕生-ピアス・イーガン『ロンドンの生活』」『英国文化の世紀2-帝国社会の諸相』(東京: 研究社, 1996) pp. 31-2; 君塚 直隆『ジョージ四世の夢のあと-ヴィクトリア朝を準備した「芸術の庇護者」』(東京: 中央公論社, 2009) p. 45. なお、リージェンツ・パークは当初、教区名にちなんでメルルボン・パークと呼ばれていたが、本稿では、リージェンツ・パークで統一する。また、カールトン・ハウスはジョージ4世がバッキンガム宮殿に移ることを決めたことを受け、1826年に取り壊された。

³ 拙稿「19世紀初頭における王室リージェンツ・パーク・エステート計画に関する考察」『愛知学院大学文学部紀要』44, (2014) .

⁴ Donald Olsen, *Town Planning in London: The Eighteenth and Nineteenth Centuries* (1964, New Haven: Yale UP, 1982) ; Olsen, *The City as a Work of Art: London • Paris • Vienna* (New Haven and London: Yale UP, 1986) .

⁵ John Summerson, *The Life and Work of John Nash Architect* (London: George Allen & Unwin, 1980) .

⁶ Dana Arnold, *Rural Urbanism: London Landscapes in the Early Nineteenth Century* (Manchester: Manchester UP, 2005) .

⁷ Geoffrey Tyack, "Reshaping the West End," *John Nash: Architect of the Picturesque*, ed. Tyack (Swindon: English Heritage, 2013) Chapter 6.

⁸ Deborah Nord, *Walking the Victorian Streets: Women, Representation, and the City* (Ithaca: Cornell UP, 1995) ; Erika Diane Rappaport, *Shopping for Pleasure, Women in the Making of London's West End* (Princeton and Oxford: Princeton UP, 2000) pp. 8-10, 150-3.

⁹ Hermione Hobhouse, *Regent Street: A Mile of Style* (1975, Chichester: Phillimore, 2008) .

¹⁰ 拙稿「19世紀初頭における王室リージェンツ・パーク・エステート計画に関する考察」, p. 72.

¹¹ J. Mordaunt Crook, "John Nash and the Genesis of Regent's Park," *John Nash*, ed. Tyack, p. 75.

¹² *The First Report of the Surveyor General of His Majesty's Land Revenue* (1797) pp. 16-7 および *The Fourth Report of the Surveyor General of His Majesty's Land Revenue* (1809) pp. 28-9, 89-91.

¹³ *The First Report of the Commissioners of His Majesty's Woods, Forests, and Land Revenues* (1812),

- pp. 10-3.
- ¹⁴ Richard Dennis, *Cities in Modernity: Representations and Productions of Metropolitan Space, 1840-1930* (Cambridge, Cambridge UP, 2008) p. 116.
- ¹⁵ “Report of Mr. John Nash, Architect in the Department of Woods; with Plans for the Improvement of Mary-le-bone Park,” in *The First Report of the Commissioners of His Majesty’s Woods, Forests, and Land Revenues* (1812) , p. 89.
- ¹⁶ Arnold, *Rural Urbanism*, p. 94.
- ¹⁷ 水谷 三公によれば、西側と東側の区別が明確になるのは、17世紀末から18世紀前半にかけてである。シティの西に宮殿や議会があったことも影響していると考えられる。水谷 三公『貴族の風景—近代英国の広場とエリート』（東京：平凡社，1989年）p. 44; Rappaport, *Shopping for Pleasure*, p. 8; 鈴木 博之『ロンドン—地主と都市デザイン』（東京：筑摩書房，1996）pp. 78-9; 松村「都市文学の誕生」, p. 32.
- ¹⁸ チャウナーは、1808年、フォーダイスの指示で、新街路の候補として、ヘイマーケットからオックスフォード・ストリートまでのラインを調査しており、レバートン&チャウナー案は、その時の調査に基づいて、ルート設定がされている。Hobhouse, *Regent Street*, pp. 6-7 参照。
- ¹⁹ “Report of Mr. John Nash,” p. 89.
- ²⁰ Ibid., p. 88.
- ²¹ Ibid., p. 89.
- ²² 鈴木『ロンドン』, p. 79.
- ²³ 現在、ソーホーやヘイマーケットはロンドンの中心地に位置し、有名な歓楽街となっている。セント・ジャイルズは、大英博物館の近くにあたる。
- ²⁴ Laurel Flinn, “Social and Spatial Politics in the Construction of Regent Street,” *Journal of Social History*: 46-2 (2012) : p. 368.
- ²⁵ “Report of Mr. John Nash,” pp. 90-1.
- ²⁶ Arnold, *Rural Urbanism*, p. 81.
- ²⁷ “Report of Mr. John Nash,” pp. 89-90. Tyack, “Reshaping the West End,” p. 103. 2つのサーカスは現在もそれぞれ、オックスフォード・サーカス (Oxford Circus)、ピカデリー・サーカス (Piccadilly Circus) と呼ばれているものである。四角形の広場は後述するように、改編案では削除された。
- ²⁸ “Report of Mr. John Nash,” p. 90; Cliff Moughtin, Taner Oc, and Steven Tiesdell, *Urban Design: Ornament and Decoration* (Oxford: Butterworth Architecture, 1995) p. 34.
- ²⁹ Letter from T. Moore to J. Corry, 24 Oct. 1811, quoted in Summerson, *The Life and Work*, p. 71.
- ³⁰ Hobhouse, *Regent Street*, xi; Tyack, “Reshaping the West End,” p. 103.
- ³¹ 永松 栄『都市と建築の近代—プレ・モダニズムの都市改造』（京都：学芸出版社，2008）p. 42.
- ³² Jonathan Barnett, *City Design: Modernist, Traditional, Green and Systems Perspectives*, 2nd edition (New York and London: Routledge, 2016) pp. 82-3; Anthony Sutcliffe, *Paris: An Architectural History* (New Haven and London: Yale UP, 1993) pp. 68-73; Tyack, “Reshaping the West End,” p. 103.
- ³³ ナッシュ自身が日記や著書を残していないので、国外旅行等の信憑性については、他人の日記やその他の文書に偶然記されたことから再構築するしかない。Crook, “John Nash and the Genesis of Regent’s Park,” p. 76 を参照。

- ³⁴ *The Second Report of the Commissioners of His Majesty's Woods, Forests, and Land Revenues* (1816) , p. 19. なお、この時、ナッシュは改編案を2案提出したが、採用されなかった方の設計図は残っていない。Tyack, “Reshaping the West End,” p. 103 を参照。
- ³⁵ *The Second Report*, p. 116.
- ³⁶ Summerson, *The Life and Work*, pp. 79-80.
- ³⁷ *The Second Report*, Appendix, No. 26, p. 124; Tyack, “Reshaping the West End,” p. 103 も参照。
- ³⁸ Hobhouse, *Regent Street*, p. 47; 鈴木『ロンドン』, p. 75.
- ³⁹ Tyack, “Reshaping the West End,” p. 103.
- ⁴⁰ *The Second Report*, p. 19.
- ⁴¹ Ibid.
- ⁴² Arnold, *Rural Urbanism*, pp. 82-4; Summerson, *The Life and Work*, p. 79.
- ⁴³ *The Second Report*, p. 20.
- ⁴⁴ *The Third Report of the Commissioners of His Majesty's Woods, Forests, and Land Revenues* (1819), p. 12. Hobhouse, *Regent Street*, p. 25 も参照。
- ⁴⁵ Summerson, *The Life and Work*, p. 80; Arnold, *Rural Urbanism*, p. 84.
- ⁴⁶ 1826年7月5日に New Street の口座が閉じられた時、最終支出は £1,535,688 を記録した。Summerson, *The Life and Work*, p. 87 を参照。
- ⁴⁷ Hobhouse, *Regent Street*, p. 26.
- ⁴⁸ Ibid., pp. 24-5.
- ⁴⁹ Olsen, *Town Planning*, p. 8; 鈴木『ロンドン』, pp. 131-2; 水谷『貴族の風景』, pp. 133-4.
- ⁵⁰ Hobhouse, *Regent Street*, p. 25.
- ⁵¹ *The Second Report*, p. 20.
- ⁵² Summerson, *The Life and Work*, p. 82.
- ⁵³ Flinn, “Social and Spatial Politics,” pp. 371-83.
- ⁵⁴ *The Second Report*, Appendix 26, p. 125, Appendix 28, pp. 128-30.
- ⁵⁵ Arnold, *Rural Urbanism*, pp. 84-5.
- ⁵⁶ Olsen, *The City as a Work of Art*, p. 19.
- ⁵⁷ Arnold, *Rural Urbanism*, pp. 83-4.
- ⁵⁸ パートンが担当した区画は、図5上で、番地つきで↔のように記した。同様に、バクスターおよびナッシュの担当した区画もそれぞれ、↔、↔のように記した。なお、図5の詳細については次章で述べる。Arnold, *Rural Urbanism*, pp. 85-7 を参照。
- ⁵⁹ Moughtin, *Urban Design*, p. 34.
- ⁶⁰ Barnett, *City Design*, p. 81.
- ⁶¹ Olsen, *The City as a Work of Art*, p. 18.
- ⁶² Ibid.
- ⁶³ Dennis, *Cities in Modernity*, p. 1.
- ⁶⁴ James Elmes, *Metropolitan Improvements; or London in the Nineteenth Century*, (London: Jones & Co., 1828) . また、タリスのストリート・ビューは、1838年と1847年の改訂版の2つがあり、その両者は、John Tallis, *Tallis's London Street Views 1838-1840* (London: The London Topographical Society, 1969) として再販された。本稿では、リプリント版の1838年の方を参照した。ホブハウスは、1847年のものについて解説している。当時のガイドブックの全体像については以下を参照。Bridget Cherry and Nikolaus Pevsner, *London 4: North* (London:

- Penguin, 1998) p. 709; Simon Bradley and Pevsner, *London 1: The City of London* (London: Penguin 1997) p. 151.
- ⁶⁵ 19世紀末の大改造直前のストリート写真は、タイヤックおよびホブハウスに複数掲載されている。
- ⁶⁶ Tyack, “Reshaping the West End,” p. 123.
- ⁶⁷ Tufts Digital Library 所蔵、Tallis’s London Street Views, No. 4: Regent Street, from the Circus Oxford Street, to New Burlington Street, p. 2.
- ⁶⁸ Olsen, *The City as a Work of Art*, p. 19.
- ⁶⁹ タリスのストリート・ビューは、リージェント・ストリートだけでなく、ロンドンの主要な通りを網羅している。本稿では、別個のページに掲載されているものから当該ストリートの部分だけを抜粋し、(1)～(10)の順に、北から南になるよう並べ直した。
- ⁷⁰ Elmes, *Metropolitan Improvements*, p. 97. なお、以後、エルメスからの引用については、そのページを本文中に()で示す。
- ⁷¹ フォーリー・ハウスはもともとポートランド公爵家がフォーリー卿に貸した土地に建てられていたもので、眺望の権利をめぐる、因縁のあった家である。フォーリー・ハウスについては、拙稿「18世紀後半から19世紀前半における王室メルリボン・パーク・エステート計画に対するポートランド・エステート開発の関わりについての研究」『人間文化』31, (2016): p. 24を参照。また、当ストリート建設に際して、ナッシュ自身がフォーリー・ハウスの土地を購入し、それをランガム卿 (Sir James Langham) に売却した。その際、その土地に建設する家はナッシュ自身が建築するという口約束をしていたが、ランガムが反故にしたため、両者の間で争いが起きた。最終的に、ナッシュではなく別の建築家によって、ランガム・ハウスが建設された。このあたりの事情については、Hobhouse, *Regent Street*, p. 47を参照。現在はランガム・ホテル (The Langham) となっている。タリスのストリート・ビューでは、ランガム・ハウスの庭が描かれている。
- ⁷² 前述のタリスからの引用にほぼ同一表現が出てくるが、エルメスのガイドブックの方が先に出版されているので、タリスがエルメスを参照したのであろう。
- ⁷³ Hobhouse, *Regent Street*, p. 43.
- ⁷⁴ Ibid., pp. 45-6.
- ⁷⁵ Ibid., p. 45.
- ⁷⁶ Tallis, *Tallis’s London Street Views*, pp. 219-47.
- ⁷⁷ Moughtin, *Urban Design*, p. 33; Barnett, *City Design*, p. 81.
- ⁷⁸ 鈴木『ロンドン』, pp. 76-7.
- ⁷⁹ Rappaport, *Shopping for Pleasure*, p. 9.